

揺れやすさ危険度・液状化危険度

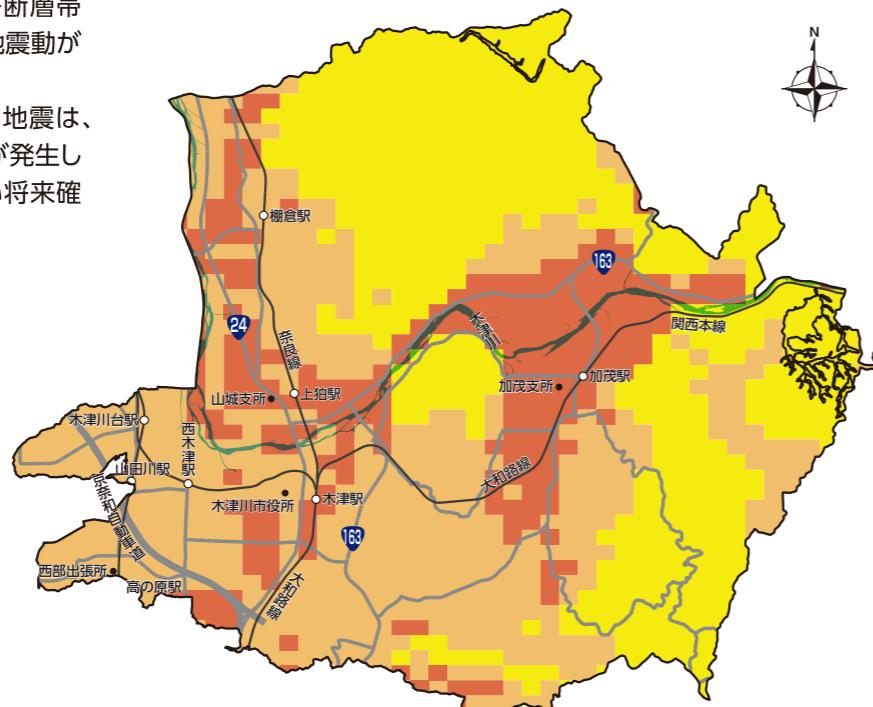
揺れやすさマップ

京都府では、府域への影響が懸念される活断層(22断層)による内陸型地震および南海トラフ地震の地震被害想定調査が実施されています。この調査において、木津川市域に特に大きな被害を及ぼすと考えられているのは、奈良盆地東縁断層帯、木津川断層帯、和束谷断層帯の活断層で、震度6弱～震度7程度の地震動が予測されています。

また、海溝型地震である南海トラフ地震は、100～150年の周期で大規模な地震が発生しており、とりわけ発生確率が高く、近い将来確実に発生すると予測されています。

震度と揺れ等の状況

震度 6弱	立っている事が困難になる。耐震性の低い木造建物は、瓦が落下したり、建物が傾いたりすることがある。
震度 6強	はわないと動くことができない。耐震性の低い木造建物は、傾くものや倒れるものが多くなる。
震度 7	耐震性の低い鉄筋コンクリート建物は、倒れるものが多くなる。耐震性の高い木造建物でも、まれに傾くことがある。



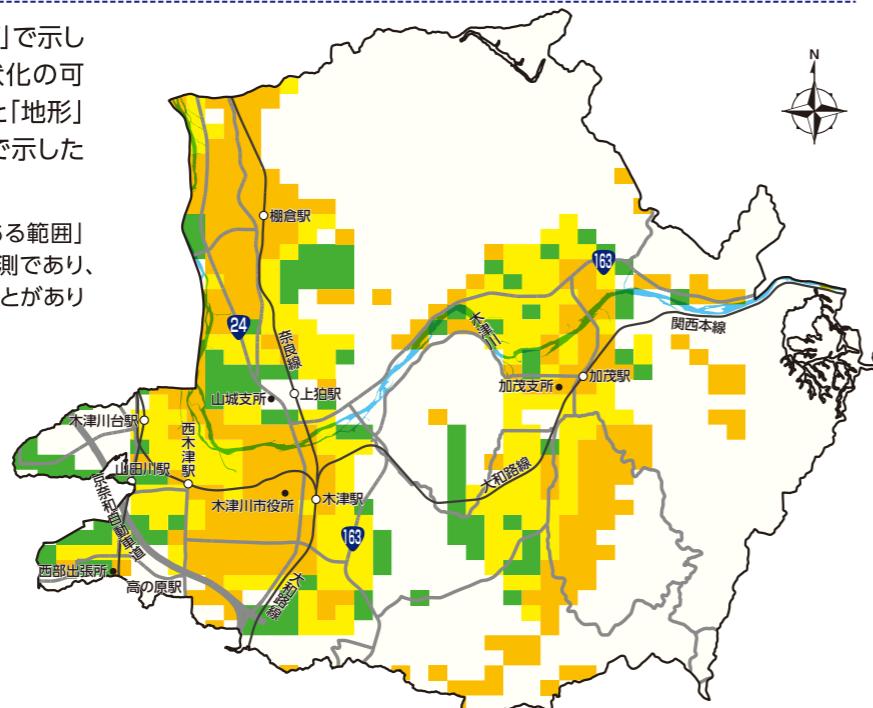
※このマップは、市域に大きな被害をもたらすと想定される活断層による地震の想定震度をまとめたものです。

液状化マップ

液状化マップは、「揺れやすさマップ」で示した強さの揺れが起こった場合の「液状化の可能性のある範囲」を、「揺れの大きさ」と「地形」から判読し、メッシュごとの地域単位で示したもの。

※このマップに示す「液状化の可能性のある範囲」は、揺れの大きさと地形による簡易な予測であり、状況によっては発生の可能性が異なることがあります。

液状化危険度 (活断層による地震時)
液状化危険度 小
液状化危険度 中
液状化危険度 大



※このマップは、市域に大きな被害をもたらすと想定される活断層による地震の液状化危険度をまとめたものです。

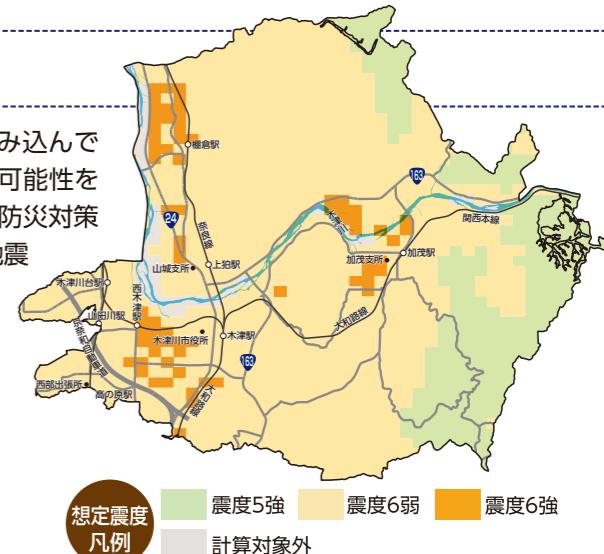
南海トラフ地震・木津川市で想定される地震被害想定

南海トラフ地震

南海トラフは、2つのプレートが衝突して海洋プレートが沈み込んでいるため、非常に活発で大規模な地震発生帶です。「あらゆる可能性を考慮した最大クラスの地震・津波」を想定する必要性が高まり、防災対策推進検討会議(中央防災会議)では、南海トラフの巨大地震の地震予想を公表しました。

※想定図の詳細は、京都府マルチハザード情報提供システム

URL: <http://multi-hazard-map.pref.kyoto.jp/top/top.asp>
でご覧いただけます。



巨大地震警戒(注意)が発表された場合は、日頃からの地震への備えの再確認を促すことを目的として、家具の固定、避難場所・避難経路の確認、家族との安否確認手段の取り決め、家庭における備蓄の確認等についてお知らせします。(「南海トラフ地震臨時情報」のキーワード(巨大地震警戒or巨大地震注意or調査終了)に応じ、必要な都度、災害警戒本部要員による調整会議又は災害警戒本部会議により、その対応についてお知らせします。)

木津川市を襲う地震の想定被害

市を襲う地震のうち、特に大きな被害を及ぼす恐れのある地震として、以下の6つの地震を想定しています。

断層・地震名	奈良盆地東縁 断層帯	木津川 断層帯	生駒 断層帯	和束谷 断層	東南海・南海 地震	南海トラフ 地震
断層の長さ(km)	35	31	38	14	—	—
マグニチュード	7.5	7.3	7.5	6.7	8.5	—
最大震度	7	7	7	6強	6弱	6強
全壊棟数	12,040	8,850	6,410	3,420	710	720
半壊棟数	8,310	8,190	7,870	5,600	2,760	—
焼失建物	3,120	2,200	1,400	780	170	20
死者数	470	330	270	110	10	30
要救助者数	2,240	1,580	1,240	520	110	110
避難者数(短期)	29,720	24,550	20,620	11,370	4,790	—

※京都府地震被害想定調査報告書(平成20年)より抜粋。死者、住家全壊、避難者数は、市内の想定被害数です。

※京都府被害想定(平成20年)

※マグニチュードとは、地震が発するエネルギーの大きさを表します。マグニチュードM=1.0の増加でエネルギーは約32倍の大きさになりますが、最大震度は震源からの距離や地盤条件によって異なります。

※最新の被害想定は京都府でまとめられており、被害想定が発表(令和7年6月頃)され次第、広報誌・HP等でお知らせします。